

演習ガイダンス(2017年度)

2017年4月7日(金)16:50~18:35
経済学研究科棟204演習室
小野塚 知 二

はじめに

(1) 世界の大学卒業生の常識(と日本の大学卒業生の非常識)

①歴史の有用性・戦略性をめぐる感覚(歴史を己の武器にする力)の決定的な相違

⇒今は過去の上に成立している。過去を参照しなければ新たな事態には徒手空拳で対応するしかない。

②問いを発する力(と「愚かな問いを躊躇する「空気」感)の相違

⇒問いを発しなければ対話は発生しないし、いつまでも「上手」になれない(兼好『徒然草』第150段)。

③「らしさ」の束縛からの解放

⇒経済学は一つの道具に過ぎないから、常識的・教科書的な経済学らしさに拘束される必要は全然ない。

(2) 自分で課題を決めて、調べ、考え、結論を出すこと

「お勉強」(=既定の知識の効率的な吸収)と「研究」(=問題発見+課題設定+問題解決)の相違

(3) 口頭発表および論文執筆の説得的な技法と能力

初等から高等までの日本の学校教育の最大の弱点の一つ。要するに相手に何を伝えたいか、相手から何を聞き出したいかということ。それに比べれば、英語力とか数学とは枝葉末節のいわば単なる手段の問題。

今年度のテーマについて

「経済的相互依存関係とそれを破壊する力：ナショナリズム、ポピュリズム、被害者意識」

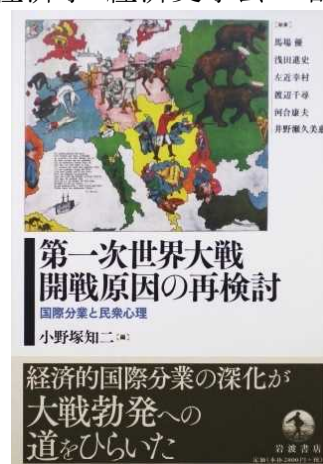
演習参加者募集要項148頁に記載されているとおりです。詳細は、開講後あらためて案内します。ゼミに参加する方は、『週刊エコノミスト』2017年1月3・10日合併号に掲載された小野塚知二「被害者意識に彩られたナショナリズムへの回帰」を予め読んでおいて下さい。今年度の演習の基本的なテーマはそこに、ごく簡略に記してあります*1。

これは東大EMP*2で講義してきたテーマで、また2014年には政治経済学・経済史学会の春季総合研究会で取り上げ、その成果を小野塚編『第一次世界大戦開戦原因の再検討 ―国際分業と民衆心理―』(岩波書店)として刊行しました。趣旨は簡単には以下の通りです。

第一次世界大戦前の世界経済は、いまでは想像もしにくいことですが、きわめて密接に結びつき、円滑かつ循環的に発展していました。物財の貿易、資本の輸出入、人の移動・移住はいずれもほとんど障壁なくなされ、世界各地の経済は、植民地も含めて、きわめて順調に成長し続けていました。しかも各地の情報は現在と同様に瞬時に世界の人々の間に行き渡っていました。これを第一のグローバル経済といえます。

そうした世界経済の円満な発展ゆえに、いまや国境も関税も意味を失い、まして戦争など起こるはずもないと楽観的に考える自由主義的平和主義者(Norman Angell)がもてはやされ、また、他方では各国で勢力を増しつつあった社会主義運動も労働者の国際連帯(インターナショナリズム)を堅持して、帝国主義戦争には加担しないことを誓い合っていました。それにもかかわらず、1914年の夏のある日、第一次世界大戦は突然勃発して、緊密に結び付いたグローバル経済は瞬時に破壊されてしまったのです。

しかも、イギリスはそうした経済の中心であり、基軸通貨ポンドを世界に提供し、世界の貿易・海運・保険を担うことで、この第一のグローバル経済から大きな利益を得ており、それがイギリスの外交上の優位性の大きな源泉でもありました。イギリスの政治家もそのことは承知していましたから、参戦には大いに躊躇逡巡するのですが、奇妙なほど、彼らは後ろ向きに、戦争という蟻地獄に向かって落ち込んでしまいます。参戦でイギリスが経済的・外交的な利益を喪失しただけでなく、世界も有力な中立国・停戦仲介者を失って、大戦は足かけ5年におよぶ悲惨な災厄を世界にもたらすこととなります。その後一世紀以上、現



*1 「被害者意識に彩られたナショナリズムへの回帰」で検索すれば、週刊エコノミストのウェブサイトで、拙文は全文閲覧できます。

*2 <http://www.emp.u-tokyo.ac.jp/>

在にいたるまで、第一次世界大戦前と同様の円滑・円満なグローバル経済は回復していません。第一次世界大戦後、現在まで一世紀の世界経済は、短い例外を除けば、概して、不安定と不均衡と分断とで特徴付けることができます。第二次世界大戦後は、仏独和解・欧州統合や「冷戦体制の終焉」で、日本と中国・韓国・ロシアの間を除くなら、既に終わっていますが、第一次世界大戦の戦後はまだ終わっていないのです。

では、誰も望んでいなかった不条理で不合理な戦争はなぜ発生したのでしょうか。通説となっている「帝国主義諸列強の対外膨張策の衝突」、「3 B 政策と 3 C 政策の対抗」、「三国同盟と三国協定の対立」はいずれも開戦原因をほとんど説明できません。戦争責任論(ヴェルサイユ条約のドイツ責任論)を離れて、開戦原因を冷静に再考することは、第一のグローバル経済が破壊された理由を知るために有益なだけでなく、現在の東アジア・東南アジア(経済的には密接に結びつきながら、外交的・軍事的な緊張が絶えず、民衆心理には対外不信感や敵愾心が静かに醸成されているこの地域)に生きるわたしたちには喫緊の課題です。

経済的関係が良好なら平和は保たれ、戦争は発生しないのだろうか。これが現在の東アジアに、そして昨年以降はヨーロッパやアメリカも含む世界に突き付けられた問いです。いまや自国を「被害者」として、特定の他国を「加害者」や「侵入者」・「異物」として攻撃し、排除しようとする言説が世界中に満ち溢れ、こうした言説を事とする国々と勢力はハリネズミのように「自衛」のための軍事力と口実で武装しています。

20世紀末以降、東アジア・東南アジアが世界経済の成長と第二のグローバル化の牽引車の役割を果たしてきましたが、まさに、この地域の経済は非常に密接で切り離しがたい関係にありながら、他方で東アジア諸国の間にはさまざまな外交的・軍事的な問題と民衆心理上の反感・不信感がくすぶってきました。それが、第二のグローバル経済の成長鈍化と不透明化を経験して一挙に欧米諸国にも飛び火し、また、近年、展開している超域型のテロ・ネットワークも「被害者」意識と攻撃的「自衛」とで特徴付けることができます。こうした状況がどのようにして発生し、蔓延したのかを百年前の事例に注目して考察してみましょう。

ゼミと卒論について

せっかく進学しても、講義に出ているだけでは経済学部で自分が何を学んだのかは、卒業して半年もしないうちにほとんど忘れてしまうでしょう。ゼミで討論し、ご自分でテーマを決めて研究し、卒業論文に書いたことは、自分の財産としてあとまで残ります。卒業後に勉強の効果が残るかどうかという点だけでなく、就職活動の際にも自分でテーマを決めて研究しているということが非常に高く評価された例を最近いくつも耳にしています。経済学部や法学部のように多人数講義が主体の教育を行っているところでは、ゼミで個人研究を進め、卒論を書かなかつたら、大学で学んだ証しを残すのは非常に難しいのです^{*3}。

ぜひ、おもしろい卒論を執筆することを今後2年間の目標の一つに設定してください。そのために必要な助言と指導は必ずゼミで得られます。自力で何かを調べ、その成果を論理的に表現して、口頭で、また文章で発表するという技法は学生時代に身に付けておけば、どの進路を選んでも非常に役に立ちます。

ゼミについてのわたしの考えは、かつて、あるインタビューで詳細に述べましたので、参考にしてください^{*4}。

個人研究のテーマ選定について

個人研究のテーマは、演習のテーマに縛られる必要はありません。ご自分の関心のある、研究してみたいテーマを選んでください。ただ、テーマによって、研究のしやすさ／難しさが違います。卒論提出までの20ヶ月ほどで成果が出せないと困りますから、どんなテーマでも研究できるというわけではありません。テーマを選ぶ際は、まず、関心のあることながらをいくつか候補として挙げて、ご相談ください。5月か6月のうちに、とりあえずのテーマを決めてください。その最初の研究成果を秋の合宿で発表してもらいます。

昨年度の卒論のテーマ、実際のゼミの雰囲気、合宿等については新4年生の諸君にうかがってください。

^{*3} これは、東大経済学部卒業生のかなりの部分は東大法学部卒業生より優秀ではないかとわたしが考えている根拠で、伊賀泰代氏が『採用基準』(ダイヤモンド社、2012年)の第1章コラムで論じているのとは少し異なりますが、自力で何かを成し遂げる経験の有無という点では通底するところもあるでしょう。

^{*4} 「新しい大学選び」第3回(洋々・大学別キャンパスライフ、2009年3月) <http://you2.jp/ao/course-03.htm>